

## ケアの観点からの「十全な意味での行為者性」に関する分析（要旨）

早川 正祐（東京大学）

人間の行為者性に関してその根幹をなす特徴とは何か？ 現代行為論の文脈では、この問題は「意図や意図的行為とは何か」という問題と関連付けられて論じられてきた。しかし、我々は単になにごとかを意図的に為すだけの存在ではなく、心から欲していること、追求する価値があると思っていること、こういった、自分自身が積極的に支持する(endorse) ことに関与しうる存在でもある。そこで「自分自身が積極的に支持することに関与していると認められるためには、どのような行為者性が要請されるのか」、プラットマンの言葉を借りれば「十全な意味での行為者性(full-blown agency)とは何か」ということが行為論における一つの主要な問題として論じられるようになってきたのである。

本発表では、この問題をケアの観点から考察する。とはいえ、ケアという言葉は英語では様々な意味をもつ。それゆえ、同一の対象に対してある意味（例えば「気にする」という意味）ではケアしているが、別の意味（例えば「専心没頭している」という意味）ではケアしていないということがあり得る。しかし、このような多犠牲があることを踏まえつつも、ここで出発点としたいのはフランクファートのケア概念である。

フランクファートは、数ある意味の中でも、「x に対するケア」の一つの中心的な意味を、「(自分にとって)x を大切に思っている」という意味を含むものとして 従って単にそれだけではケアとは言えず+ があるが 捉えた。ケアという概念は日本語ではその対象は主に人であるが、多くの論者が指摘しているように、様々なこと(活動・プロジェクト・理想)もまた 日本人には大いに違和感があるだろうが ケアの対象になるのである。そこで、人に対するケアと物事に対するケアには相違点があることを認めつつも、両者のケアがゆるやかに共有している特徴に焦点を当てたい。そうすることによって人間の行為により広く関わるものとしてケア概念を提示できる。

さて、フランクファートの特徴づけで注目すべきことは、「大切に」という対象への思い入れを含むものとしてケア概念を捉えることによって、「十全な意味での行為者性とは何か」という問題を、ケアするというあり方から分析することが可能になる点である。というのもある対象をケアするとき、自分にとって大切にという了解をもちつつ、その対象に関わる活動を営むのだとすれば、その活動はその人によって些細なものと考えられているのではなく積極的に支持されていると言えるからである。そうだとするとケアするというあり方は、十全な意味での行為者性の一つの形態を示していることになる。そこで本発表ではフランクファートが萌芽的な形で導入したケア概念を出発点としながらも、さらに踏み込んだ考察をする。そしてケアの観点が、十全な意味での行為者性のいかなる側面に光を当ててるのか、さらにそれはどのような含意をもつのかについて展望を示したい。